
濡れ猫

ジョンソン内田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

濡れ猫

【Nコード】

N3451B

【作者名】

ジョンソン内田

【あらすじ】

短編ですので、短編らしい作品を書いていきたいです

僕は小学校から一人で帰る。

帰り道の公園、小さな猫がダンボールの中に捨てられていた。
雨が降りしきっていた。

僕は青い傘をかざしてあげた。

僕は家に帰りたくないからその子猫と遊んで帰った。
頭をなでてあげた。

子猫は目を細めながら僕に擦り寄ってきた。

日が落ち暗くなって僕が帰ろうとすると、子猫は大きな目を潤ませながら必死で泣きだした。

僕は「ごめんね」と言った。

子猫はずっと泣いていた。

僕は、少し後ろを振り向いて子猫を見つめながら首を横に振った。

家に帰るとお母さんがお父さんの悪口を僕に向かって言った。

僕は黙って聞いていた。

もうすぐ何が起こるかもわかっていた。

お父さんが帰ってくるとお母さんとケンカを始めた。

僕はふとんの中で怒鳴り声が聞こえないようにふとんを深くかぶって眠った。

夜。子猫が夢の中に出てきた。

「ごめんねえ」と僕は言った。

「いいんだ。人は毎日自分ができるところをやるしかないんだ。できないことはやる必要ないよ」

「でも僕本当は君のことを飼いたいんだ」

「わかってる。君は君のできることを僕にしてくれてるじゃないか。毎日自分のできることをすればいいんだ。僕は泣くことしか出来ないけれど。でもそうやって僕達は生きていくしかないんだ。」

次の日、僕が学校の帰り道公園に行くと子猫はいなかった。

しばらくして僕はお母さんと一緒に遠い街で暮らすことになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3451b/>

濡れ猫

2010年12月14日19時51分発行